

平成 27 年度第 3 回グローバル教育推進委員会議事録

1 日 時 平成 27 年 11 月 6 日（金）9:30 ～11:30

2 場 所 高知共済会館（3階 会議室 藤）

3 出席者

【委員】 石筒覚委員、江原美明委員、葛城崇委員、坪谷ニューエル郁子委員、長崎政浩委員、山本ベバリーアン委員、中山 雅需委員（座長）

【オブザーバー】

高知南中学校・高等学校 校長（谷岡）、副校長（廣瀬）

高知西高等学校 校長（松木）、教諭（井上）

【県教育委員会事務局】

小中学校課 チーフ（森）、指導主事（谷口）

高知県教育センター 所長（下司）、チーフ（武市）、

指導主事（南、田中、渡部、樫尾、上田、竹本）

高等学校課 課長（藤中）、企画監（坂本）、課長補佐（高野）、チーフ（松井）

指導主事・主査（市原・野中・阿野田・久保・川田・前野）

4 協議事項

「グローバル教育プログラム（探究型学習と英語教育）について」

探究型学習について、教育センター（武市チーフ）から①「アクティブ・ラーニングに取り組む際の学校の体制づくりや教員の意識転換などの進め方について」、②「知識構成型ジグソー法について教員全体で共通理解ができるシラバス作成のポイントについて」の説明があり、その後、質疑応答を行った。

委員：

- ・それでは、まず、「アクティブ・ラーニングに取り組む際の学校の体制づくりや教員の意識転換などの進め方について」ご意見をお願いしたい。

委員：

- ・11月5日に開催された高知南中・高校の研究報告会や高知西高校のグローバル探究Ⅰの探究型学習は、生徒は物怖じせず、自主的、協働的に取り組んでいた。
- ・生徒が積極的に取り組んでいる場面を見ることで、教員の意識転換につながっているのではないかと。あとは、質的にどのように高めていくのかが課題である。この事業に着手している教員だけで進めていくと、不安を持ちながら進むことになる。両校で意見交換し、情報の共有を広げていくことが大切である。翌年に向けた下地を、早いうちにつくっていくことが大切だろう。

委員：

- ・新しい取組をする際に、何か大事なことはあるか。

委員：

- ・授業ではコアの設定をし、ねらいを明確にさせて概念の部分まできちんと理解させることが、大事である。さらに内省させることが必要である。例えば、中学1年生のHP作成の授業では、①もっと良いリサーチやもっと深いリサーチをするためには、②もっと良い解決策を考えるには、③もっと良いプレゼン方法にするには、といった具体的な内省をさせることが必要である。

委員：

- ・この内省をすることによって、人は行動を変えることができる。テキストを読む時にもどのような目的で書かれたものかを、考えさせるように意識づけると良い。

委員：

- ・授業者が何に気づき、何を学んだか。会議室で話しても答えは出ない。実践者が振り返り議論し、次の実践に活かすことが大事である。教員も実践と内省が必要であり、誰かが年に1回公開授業をやれば良いという考えではいけない。教員がアクティブ・ラーニングしていく必要があり、そういう教員のもとで、生徒は学びを深めることができる。

オブザーバー：

- ・全員の意識転換はまだ難しいのが現状であるが、まずは国語科と社会科において、若年教員と科長、教育センターでチームとして取り組んでいる。今年は、知識構成型ジグソー法での授業を26回実施した。

事務局：

- ・これまでの教科会は、事務連絡が中心であったが、知識構成型ジグソー法を共通の視点として、教材づくりや授業づくりにチームとして取り組むことで、授業改善の気運が高まっている。校内研修では、全員が公開授業を実施しており、本年度は参観率も高まった。課題は、アクティブ・ラーニングの視点において、より効果的な授業デザインを研究することである。知識構成型ジグソー法の目的や方法は理解しているが、生徒の主体的・協働的な学習をうながし、より深い学びにつなげていくにはどのような「問い」を設定すればよいか、また適切な資料を作成すれば良いのかをさらに研究する必要がある。

事務局：

- ・「教員が説明する」授業から、「生徒に考えさせる」授業への転換が必要である。

委員：

- ・生徒がどうしたらやる気になるか、生徒の何に役立つのかという意識を教員が持つことが大切である。そうすることで、保護者への説明も明確にできるようになる。

委員：

- ・調べ学習と探究学習の違いは何か。調べ学習は、調べたことをまとめて発表することである。探

究学習とは、学習内容の概念に到達できるかどうかであり、そのコアに対する疑問が出てくると、さらに深い学びにつながる。教員の意識転換のポイントは、教員自身が授業デザインをしていくために、学び続けるという意識をもつことである。

オブザーバー：

- ・本校が探究型学習や英語教育に取り組み始めた頃は、やらされ感で進めていたことは否定できないが、現在は、内発的にやろうという意識が高まってきた。
- ・昨日の研究報告会での公開授業も心配していたが、皆、頑張ってくれた。アクティブ・ラーニングに取り組む学校として、校内の意識も高まってきたと思う。
- ・グループ活動については、生徒の動きはアクティブになってきたが、学びの部分がアクティブになっているのかという課題がある。また、中学校はアクティブな動きが出来ているが、高校は、相変わらず一斉型授業が多い。
- ・知識構成型ジグソー法は、問いの立て方や指導案が細かく、教員の負担は大きい。学習指導要領に基づいたものも必要だが、シンプルなものではいけないのか。
- ・CoREF（東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構）では、カメラを何台も置いて分析しているが、授業の参観者は、どこを観たらよいか分からないため、参観のポイントを共有する必要がある。講師の飯窪氏は、「学習目標に100%到達した生徒はいなかったが、80%くらいはいた」とコメントされたが、我々はわからなかった。教材の準備をシンプルにすることと、普及のためにどういった評価をすれば良いかを教えていただきたい。

委員：

- ・探究型学習のポイントは、コアと深い内省である。コアの部分が明確でないといけない。国際バカロレアのPYP（初等教育プログラム）の6つの概念が参考になるのではないかと。

委員：

- ・国際バカロレアの6つの概念とは
 - ① 自分自身について
 - ② 私たちがおかれている場所や時代について
 - ③ 自己の表現方法について
 - ④ すべてのことはどのように機能しているのかについて
 - ⑤ 社会を体系付ける方法について
 - ⑥ 地球に共存する術について
- ・中学校では教科別に学習し、高校はさらに細かい科目となる。生徒は、どういったことを深めたいのかを決め、高校教育に進んでいく。

委員：

- ・主体的・協働的に教員はやっていますか。「総合的な学習の時間」が上手くいかなかったのは、「知識を教える」ことからの転換ができなかったからである。校長や教育委員会がやれというからやるのではなく、教員自身が主体的な学びをしていただきたい。

委員：

- ・地域協働学部では、80%がアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングをやらないと、生き残れない組織づくりをしている。レポートを丁寧に見て、学生が出来なければ問いを考え直すようにしている。ハードだが転換していく。高知大学では、そのようにしている。
- ・教員としてのアクティブ・ラーニングについては、学内だけにとどまらず、いろいろな立場で取り組んでいる。中・高・大が連携してアクティブ・ラーニングができる場をつくる。例えば、大学と高校が集まれるように高大接続実行委員会がある。

オブザーバー：

- ・調べ学習ではなく探究学習にするための方法は、勉強になった。しかし、探究型で調べ学習をしたあと、具体化された活動から抽象化される段階のモデルケースがなく、その先、どのようにコアや概念に導いていくのか、行き詰っている状態である。

委員：

- ・教員の役割は、的確な質問をすることである。①事実、②変化、③視点、④つながり、⑤要因、⑥どんな役割・機能、⑦私たちにはどういう責任があるのか、いくつかを選んで質問をしていくと良い。そして、内省を癖にしていく必要がある。常に内省を繰り返すことが大事である。内省がないところに進歩と学びはない。レベルは、深ければ深い程よい。
- ・東京インターナショナルスクールでは、思考法の1つである「6つの帽子（エドワード・デ・ボノ博士）」を考え方のトレーニングとして、4歳から取り入れている。
 - ① 白…中立的視点（事実やデータなど、あるものや不足しているものを考える）
 - ② 赤…感情的視点（感情・意図・情緒・直観で考える。ただし直観は時々間違っている）
 - ③ 黒…批判的・消極的視点（用心・リスク・批判的・負の論理で考える）
 - ④ 黄…希望的・積極的視点（利益・価値・どう実現するかを正の論理で考える）
 - ⑤ 緑…創造的視点（新しいアイデア、代替え案、可能性を考える）
 - ⑥ 青…冷靜的・思考プロセス的視点（思考そのものを思考したり、リーダーの視点で考える）このように異なる視点からアイデアを得る方法で、企業研修から始まったものだが、本校で20年間取り組んできた。これをやってみてはどうか。

委員：

- ・ありがとうございました。内省する癖をつけることの大切さ、また思考法についても大変参考になった。それでは、2つ目の協議事項である「知識構成型ジグソー法について教員全体で共通理解ができるシラバス作成のポイントについて」ご意見をお願いしたい。

委員：

- ・英語教員は定期的集まっているのか。
- ・英語教員の配置はどうなっているか。

- ・テストは教科会で話し合っって作成しているのか。またいつごろ作成するのか。
- ・授業実践記録は自主性にまかせているのか。

オブザーバー：

- ・中・高別々に週1回実施している。しかし、中高合同の会を放課後に実施する場合がある。初任者が中・高それぞれにいる。(教員15名 ALT3名) 常駐指導主事は全てに出席している。
- ・英語は複数学年を担当するようにし、3学年を見通した指導ができるようにしている。
- ・テストは学年で統一し、テスト直前の科会で協議しながら作成している。

事務局：

- ・授業実践記録は、教員の負担にならないようにしたい。中・高それぞれの研究主題と言語活動の充実という視点から、授業について記録することを常駐指導主事が提案した。ねらいは、この記録をとおして、先生方が授業を振り返り、授業改善につなげることである。そして、授業実践記録を交流することで、互いの実践の共有化、高知南中高の英語の授業ベクトル合わせとしたい。

委員：

- ・「英語意識調査」について、中学生と高校生の回答数に違いがあるのはなぜか。

事務局：

- ・高校生には、他の中学校からの入学者が加わっている。

委員：

- ・高校には、他の中学校から入ってきている生徒もいるのであれば、このデータに正確性はない。中学校から高校に進学した後の意識の差を見るには、同じ生徒で追跡調査をしないといけない。次回からは、そのデータの取り方で分析してほしい。

委員：

- ・定期テストの内容はどうなっているのか。CAN-DO リストに応じた評価はされているのか。

事務局：

- ・定期テストは、知識・理解を問うものが多く、暗記すれば解けるものがあることが気になったので、英語力向上を目指した筆記テスト作成について、教会内研修を行った。また、パフォーマンステストを計画的に行い、CAN-DO リストの達成を目指している。

委員：

- ・授業では新たな取組を進めているのに、テストは従来通りということではいけない。授業でやったことが、テストで確認できるものでなくてはならない。

委員：

- ・言語の獲得には時間が必要である。学習時間の絶対数に比例するという事実があるが、学校内では限界がある。このことを国はどう思っているのか。学校外で補うということも含めて考えているのか。

委員：

- ・学校での英語学習の時間は、小学校で 70 時間、中学校は 420 時間、高校は 455 時間、合計で 945 時間である。言語の獲得には本来 2400 時間必要と言われていたが、この差をどうするかについて、文部科学省が示すのは難しい。塾や家庭に押し付けられない方法としては、「英語を教える」のではなく、「英語の勉強の仕方や興味を持たせ方」を伝える 945 時間にした方が有効的ではないか。また、反転学習や ICT の活用の仕方も、もっと工夫できるのではないか。例えば、研究報告会の英語の授業では、授業時間内においてタブレットで調べたことを、みんなが質問し回答するという形式であったが、調べることに時間がかかり、間延びしていた。この部分を家で調べさせておいて、授業ではそれを基に本人が他の生徒にクイズを出す形式にする。その後、教室内でやりとりされた内容をもとにさらに調べてみようなど、工夫すれば授業での活動を間延びせずにコントロールできる。また、調べる記事が英語であれば、英語に触れる時間を増やすことも出来る。

委員：

- ・授業実践記録については、負担が大きくなるものではなく、振り返りが授業者の成長につながるものにすべきである。
- ・多読については、全員の到達点が違う。多く読めば能力向上につながるという考え方もあるが、おもしろいから読みたくなるという流れにしてほしい。読んで良かったものや、おもしろかったものを、友だちに伝えたいような活動にしてほしい。そうすることが、多くの主体的な学習者を生む可能性がある。

委員：

- ・Web 上には、リソースがたくさんある。毎日 20 分でも英語に触れることが大事である。BBC のホームページではゲーム感覚で語彙を増やせる。英語圏の生徒と手紙やメールのやり取りをすることもよい。

委員：

- ・授業やカリキュラムデザインの振り返りは、知識がないとできないが、高知南高校の強みは、指導主事が常駐していることである。英語学習に多くの時間が必要だが、時間に見合った目標を立てると、実のあるシステムをつくることができる。限られた時間で教科書の内容を終わらせないといけないということもあるが、インプットとアウトプットのつながりを重視すればできるのではないか。例えば、読む時にアウトプットの視点を入れる等、学び方を教えるとよい。

委員：

- ・サイトの活用については、学校で使える教材を載せている文部科学省の無料 Web サイト「英語ネ

ット」がある。

委員：

- ・たくさんの課題はあるかもしれないが、「高知でやること」に意味がある。高知で成功すれば、全国の自治体を勇気づけられる。

委員：

- ・高知南の実践は素晴らしかった。しかし、これが続くと、成功パターンにしがみつき、次への挑戦につながらないことになりがちである。失敗を恐れずにチャレンジしてほしい。

委員：

- ・多くのご意見をありがとうございました。グローバル教育やアクティブ・ラーニングは、まだまだモデルがない。だからこそリード校として、自分たちがつくるのだという気概を持ってもらいたい。失敗もしながら進めて欲しい。